

# ありのままに、あたりまえに、地域に生きて

## そして我が家の“レインマン”は ひょうきんな公務員になった

社会福祉法人あおぞら共生会 副理事長  
地域作業所あおぞらハウス 運営委員長

明石 洋子



働く広場 2003年8月号

今から二十八年前、二歳一〇カ月で長男徹之が障害児と診断され、しかも「社会での自立は困難、成人した自閉症者は収容施設」という将来像を知りました。私の両親は「阿蘇の牧場を買って、牛や馬とすごせる施設を作ろう」と、かわいそうな孫の行く末を案じ、私も「子の幸せと親亡き後の安心は施設」と覚悟しました。

ところが「障害があっても地域の中で対等な関係で、人間として尊重され、差別されることなく、社会の一員として生活する」というノーマライゼーションの思想を知り、勇気づけられた私は、「たとえ障害があっても家族と共に地域の中で生きてこそ、喜びも悲しみも共有できる。地域の中で幸せになる道を探そう」と決心したのです。

特に自閉症は誤解だらけで、障害の本質も不明、治療法も確立していません。私は治す為に別の場で特訓する（完治しないから一生

訓練になる）より、「いかに社会に自立させるか」を子育ての方針にし、たとえ能力が五〇しかなくても、不足の五〇は「人の支援を受けて自立を」と考えました。

知的障害者にとって、足が不自由な方の「車椅子」の役目を果たすのは、「人」になります。長男のQOL（人生や生活の質）は、周りに彼を知って理解し工夫する支援者がどれだけいるかにかかっています。故に幸せの青い鳥は施設にはなく、人という資源や選択肢の多い地域の中にあると思えました。

勇気を出して地域に飛び出たら、地域の方々の、適切で豊富な働きかけのおかげで、長男は社会のルールや自立のスキルや人との関わり方を学び、「ひょうきん徹ちゃん」と言われるほど、人が好きで素直で明るい子に育ちました。微々たる成長を喜び、支援してくださいました地域の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

今、社会福祉基礎構造改革が船出し、「地域で生きる本人主体の時代」が到来しました。「知的な障害がある人達の自己決定を尊重し、自己選択に任せる」とのことですが、それを実行するには、自分のことは自分で決める力が育っていること、豊富な選択肢と、「たとえ失敗しても支えてくれる」という本人が信頼できる支援があつてこそ意味があります。

幼い頃から、おやつも着る服も遊びに行く先も、選択肢を提示して（概念形成やコミュニケーションが苦手ゆえに工夫が必要でしたが）長男の意思を確認し実行してきました。そうして成長した彼が選んだのが、「高校に行きたい」（一五歳）、「清掃局で働きたい」（二八歳）だったのです。

この選択には「知的障害者の前例が無い、故に無理」という高い壁が目の前に立ちふさがりましたが、彼は自分で選んだ以上、壁を越えたいと一生懸命頑張りましたし、多くの

# 私のひごと

支援者が扉を開く為に力を貸してくれました（苦勞した分、充実感が得られます！）。

地域作業所「あおぞらハウス」は、昼の活動の場（合格したのは夜間定時制高校でしたから）として、必要でした。地域の中で「共に遊び共に学ぶ」の次は当然「共に働く」です。作業所の仕事はこれまた前例の無い「八百屋さん」でした。地域の方と毎日交流し、店頭や配達で個々の顔を覚えてもらい、地域の商店や企業に就労させたいと考え、「就労の拠点」と位置付けました。職員が就労のパイプ役（ジョブコーチ）となって、長男も八百屋以外に六つの職種を経験しました。特に文房具店でのアルバイトは、「視覚的に強い本人の特性を活かしたスケジューリングや作業手順を用意すれば、正確ですばやく完璧に仕事ができる」ことがわかり、「本人の能力以上に大切なのは、周りが理解し工夫し支援すること」が確認できました。

こうして高校卒業時には、本人の第一希望の清掃局（公務員）にチャレンジしたのです。

川崎市には「身体障害者の雇用」に構造設備等の改善が必須なと同様、知的障害者の雇用には、ジョブコーチとプログラム（手順書）等の配慮が不可欠」と交渉しました。実際に仕事が始まるまでには時間はかかりましたが、配属後「適切な例えではないが、百聞は一見にしかず。当初私が明石君に対し懸念していたことは今では全て消し飛んでいる」と、上司がある冊子に、人間味溢れる文を書いてくださった時は、心配も吹き飛び涙が出るほど嬉しく思いました。

職場の仲間も積極的に温かく励ましてくださり、おかげで長男は持ち前の明るさで、穏やかな人間関係を作り出すことができました。組合の新聞にも「明石君は一生懸命働きますし、職場を明るく楽しくしてくれまます」と書かれ、一人の人間としての良さを認め、また障害の特性を理解し、常に「どのような支援をすれば働けるか」という視点で指導してくださりました。

身体障害者と違って、見た目には能力がわからず「仕事ができるようには思えない」と言われ、雇用が難しい知的障害者でも、潜在している素晴らしい能力を発揮して働けるかどうかは、関わる「人」の理解ひとつのようです。そしてこの十年間、長男が休まず仕事を継続できたのは、なんと言っても彼の「働きたい」という強い意思があるからです。公務員チャレンジに際しても、「汗水流して働きたいです！ 社会に役立つ仕事したいです！」と強く訴えましたから、その熱い「思い」が周りを動かしたのです。

普通の人の「働いて自分の価値観で主体的に生きる」という目的は、障害のある人にとっても目標であり、願いです。彼は、最高の社会参加の機会を得て、満足感から自信がつき、生き甲斐を持って充実した生活を送っています。「かわいそうだから」と保護される道（施設）を選択しなかった親は、これでもよかったとひと安心しています。

しかし公務員の方は異動が多く、初めて出会う人に「知的障害者が働くことや仲間として受け入れること」の理解を得るまで、時には多少の行き違いはありますが、本人は、「苦勞が多いほど後の感動は大きい」ということを長年経験していますので、常に肯定的な生き方をして、毎日手順書どおりに、一切の抜きもせず一生懸命頑張っています。

今後更に知的障害者の雇用が促進され、「知的障害者がとなりで働くのがあたりまえ」の時代が来ることを心より願って、理解者を増やす努力をしていきたいと思います。今後ともご支援のほどよろしく願います。

## あかし ようこ

神奈川県川崎市在住。本業は薬剤師。「思いを育み、自立する力を育てる」を子育て方針に、「自分らしく生きるために」障害をもつ息子と共に地域に飛び出した。「あたりまえに地域で生きる環境整備」を運動方針にして、市民活動をする。療育・保育・教育そして就労も「地域の中で」がモットー。地域作業所（2ヵ所）、グループホーム（3ヵ所）、生活支援センターを設立。NHK新日本探訪「笑顔で街に暮らす」、NHK列島スペシャル「お仕事頑張ります」、韓国放送公社（KBS）日曜スペシャル「走って世の中に」など、ドキュメント番組が日本・韓国で放映された。著書【ありのままの子育て】【自立への子育て】（ぶどう社）。